平成３年　秋期展示会の報告

『東アジアの文字と文献』　併設展：最近の貴重書

１）はじめに

1991年秋、『東アジアの文字と文献』というテーマのもとに京都大学附属図書館は恒例の展示会を設けた。内容は、東アジアの象形文字の流れを中心にそえて、それに対する表音文字の影響や疑似漢字の出現などを地域と時間の流れにそって、捉えるものであった。またそれぞれの文字が現代にどのような形で生きているかも、あわせて考慮した。会期は、平成３年11月14日（木）～22日（金）の８日間であり、日曜は閉館した。時間は９：30～４：30、場所は附属図書館３階の展示室であった。なお、併設展として、最近の貴重書も展示し、出品総数は100点を越えた。参加者にはアンケートをお願いしたが、最初にその簡単な結果を報告しておく。

（表１）参観者状況

日　付	曜日	９：30－12	12－13	13－16：30	人　数
911114	木	30	16	48	94
15	金	30	41	112	183
16	土	64	15	70	149
18	月	31	29	75	135
19	火	43	35	65	143
20	水	43	28	89	160
21	木	29	25	84	138
22	金	43	37	151	231
合　計		313	226	694	1233人
平　均		39	28	87	154人

参観者の状況は（表１）を参照されたい。1233人の来館があった。内容が純粋に学術的であったにもかかわらず、総数が千人を越えたことについては、学内や一般市民のこの分野に対する並々ならぬ関心がうかがえるところである。言葉の通りに、会場が熱気に満ちていたのは事実であった。アンケートを見てみると、いくつかのお叱りもあったが、テーマ、目録、会場全般にわたって概ね好評であった。参加者が興味を惹かれた展示品としては、偽作といわれるほどに形態のととのったタイの「ラムカムヘング王碑文（レプリカ）」、歴史の教科書でよく見た「甲骨文字」の実物、五色の布地に書かれた満州の誥命（こうめい）、ポスター図案にもなった殿様蛙、いわゆる「納西（ナシ）象形文字」、井上靖の『敦煌』で著名な西夏、その華厳経やコンピュータ出力の西夏文字、併設展の鈴鹿本「今昔物語集」（今昔物語集の祖本と考えられている）などがあげられる。

２）趣旨

『今回の展示会は、附属図書館だけではなく文学部、人文科学研究所、東南アジア研究センターなどの、いわゆる国内でも有数の人文科学系諸機関に所蔵されている、由緒あり、また希な資料を一同に展示するものである。テーマ的にも、東アジア全域にわたる三千年の文字の歴史を一目で見渡せるような、気宇壮大なものである。このような事業が、附属図書館で容易にとりおこなえるのも、ひとえに京都大学の当該分野における研究実績が世界的なレベルにあることの証左でもある……』

とういうような趣旨メモが企画書の中には残っている。実際に企画運営に携わった館員の気持ちの表れであろう。

一般的に我々は西欧の歴史事績にはなじみがあるが、アジアについては知っているようで、意外に疎いところがある。ノルマンディー公ウィリアムの名は覚えていても、後期突厥（とっけつ）帝国のビルゲ可汗（かがん：首長）やその弟キョルテギンの名は殆ど忘れてしまっている。しかし、東アジアの征服王朝の数々が、アレキサンダー大王の版図も及ばない勢力と、別の文化を持っていた事実は、史をひもとけば直ちに了解される。モンゴル帝国なども、その文化意思や国家体系（システム）の緻密さは、知るものが皆圧倒される。

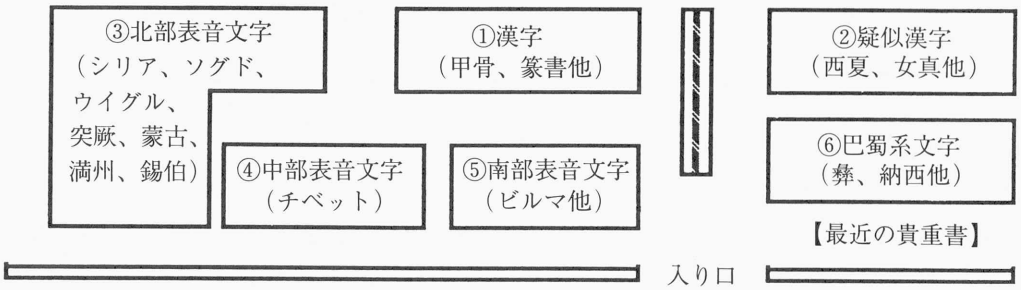
「うららかな唐の都長安の片隅で名を変えて鬱屈した人生を送っていた突厥の名門氏族が、後に名宰相として可汗を助け、その王子２人（弟は名に、湖のように聡明な、という由来のあるキョルテギン）を育て、突厥帝国を復興した」、というような史実は、歴史の厚みと文化交流の多様さや、その感性の同質性と異質性に感興を覚えるものがある。彼ら自身が文章を残したなら、どんな文字でどんな風に書いたのだろうか、という後先した疑問は、オルホン河畔の「闕特勤（キョルテギン）碑」やその他突厥碑文によって氷解する。

今回のテーマは、そのような歴史を知れば知るほど、目の眩むような想像世界に引き込む蠱惑を持っていた。

３）会場レイアウト

展示会のレイアウトは（図１）を参照されたい。このレイアウトは文学部西田龍雄教授の「東アジアの文字系統のあらまし」がもとになっている。無料配布された目録の巻頭の解説には、東アジアの文字系統を６つのブロックに分け、その地域分布と時代変遷が書かれている。ただし今回は、朝鮮と日本とは、分量の関係から省略された。

（図１）会場レイアウト



４）展示目録

期間中配布された展示目録は、西田龍雄他編、Ｂ５版21頁、表紙裏表紙カラー、白黒写真６葉、図版１の小冊子である。ここではその構成を簡単に記しておく。括弧内の数字は出展品目数を意味する。（写真１）を参照されたい。

＊表紙　：「舞踏を教える殿様蛙」納西（なし）象形文字、中国雲南省納西族の現代の東巴（とんぱ：巫師）が書いたもの。

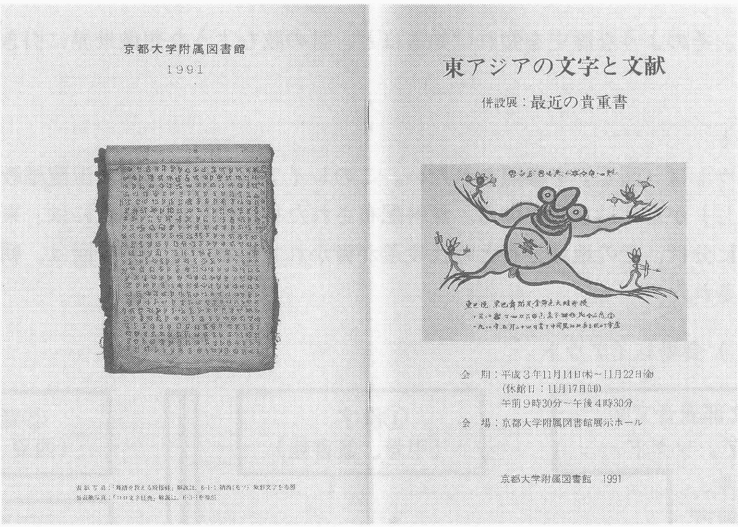
＊裏表紙　：「ロロ文字経典」明代の、中国西南地域（巴蜀の地）で書かれた、ロロ表意文字の経典。ロロ文字は彝（イ）文字ともいう。

＊図版　：「東アジア主要文字の分布と系統」

①漢字　：甲骨文（６）、金文（７）、篆書（３）、隷書（６）
写真・『唐写本説文解字残巻』、文学部蔵

②疑似漢字：契丹（５）、西夏（７）、女真（６）、字喃（２）、壮（１）文字
写真・西夏印章‘首領’、文学部蔵
③北部表音：シリア（４）、突厥（４）、ソグド（２）、ウイグル（３）、モンゴル;パスパ(10)、満州（４）、錫伯（２）文字
写真・『モンゴル大蔵経』、附属図書館蔵
④中部表音：チベット文字（６）
写真・『四部医典タンカ全集』
⑤南部表音：モン；ビルマ（３）、クメール；タイ；ラオス（５）文字
写真・「ラムカムヘング王碑文」、東南アジア研究センター蔵
⑥巴蜀文字：納西（４）、シャパ（１）、彝（６）文字
写真・『シャパ文暦書』

（写真１）
展示目録


京都大学附属図書館
1991

東アジアの文字と文献
併設展：最近の貴重書

会　期：平成３年11月14日(木)～11月22日(金)
(休館日：11月17日(日))
午前９時30分～午後４時30分
会　場：京都大学附属図書館展示ホール

京都大学附属図書館　1991

５）おわりに

今回の展示会は附属図書館の所蔵物だけでは到底まかなえず、文学部、人文科学研究所、東南アジア研究センターから多大の御協力を得た。中でも、展示目録作成に関して、文学部の永田英正教授には「漢字」について相当なご負担をかけた。御牧克己教授にはチベット文字、西南アジア史学の大江節子氏にはシリア文字に関してご援助をいただいた。東洋史学の吉本道雅氏には貴重な拓本や印章、巻物の所在だけではなく、拓本展示のための特殊器具の詳細まで教えていただいた。あわせて文学部博物館からは相当数の展示器具を借用させていただいた。また、人文科学研究所の富谷至助教授からは館員が懇切丁寧なご指導を受けている。最後になるが、短期間で緻密な目録編集作業やそのほか全般にわたって、文学部言語学研究室の家本太郎氏のご協力ご援助は筆舌につくしがたいものがあった。

大学図書館が展示会を開催することの意義や効果は、附属図書館および館員としても充分理解できるものであるが、所蔵物の確認（京都大学のような古い大学では、一体何が存在しているのかが、館員にはまず分からない）から借用、展示器具にいたるまで、殆ど大学全域にわたる援助を必要とすることがあらためて痛感された。記して感謝する。

平成４年１月　図書館専門員
谷　口　敏　夫